

下田出身の書道家に山崎大抱さんがいます。本名を準吉といい、明治四十一年に下田に生まれました。下田尋常小学校さらに下田小学校高等科を卒業し、昭和二年旧制中村中学校（五年生）を卒業しています。

その後、書への情熱は高まるばかりで、高知市へ転居し、かの有名な川谷横雲先生の指導を受け、昭和四年からは、手島右卿？先生を師と仰ぎつつ終生書の道へとひたむきに歩みが続けていくこととなります。

以後、高知市で書道塾を開くのですが、昭和十四年には、郷里下田に帰り、中村高等女学校の先生として、書の指導にあたることとなります。

旧制中学校に通学していたころの先生は、いつも本を読みながら下田から中村まで歩いて通っていたという話が残っています。また、女学校、高等学校で教えていた頃は、下田から中村まで下駄ばきで通い、服も質素なものを着ていたということです。

昭和二十六年に静岡に転居し、小・中・高等学校の生徒に書を教えながら、中央の書道家の中で頭角を現していくのです。

先生の活躍はめざましく、日展特選、日展審査員、東京芸術大学客員教授、ハーバード大学客員教授というふうには、国内外でその大抱の名前は知れわたっていきました。

大抱先生の作品は、東京の博物館に飾られておりますが、ニューヨークの市長室に飾られているものもあるそうです。

今から二十年ほど前、本校で校長として勤務された広井康延先生が大抱先生に「飛躍」の二文字を依頼し、その作品は児童玄関前に碑として飾っています。この字は海を思わせるおおらかさの中に、燃えたぎる情熱を伝えてくれるようです。大抱先生の母校を思う気持ちと広井校長先生の本校児童への情愛を今さらのように感じ、あの書をいつまでも大事にしていかなければならないという思いが伝わってきます。

先生の作品は、下田では光明寺に、また、宮崎勝治さんをはじめ、大抱先生と関わりがあった方々を書いてもらって、今も残っています。四万十市の公民館にも寄贈された作品や蔵書が収蔵されています。

書道史家の鈴木史桜さんは、大抱先生について次のように評されています。

「書とはいうまでもなく、その人の心の映像そのものである。彼の書境はすでに、そういうところにもまで達している。そうした境地が彼の驚くべき生氣を与え、その線を躍動させる。」

晩年には、名誉中村市民賞を受賞しています。

平

に世
す。



成三年、
を去って



静か
いま

